方向　第三七号　一九八五年二月一日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（二〇）

赤谷明海

〈昭和二十一年三月十日の項につづく〉

〇三月十一日、村上が突然容態を変へて来た。昨日便所へ行つて立上れずにかがみ込んでゐたのをかかへ上げた時に、大分弱つたなあの感を深くしたが、それでも普通に歩いて帰つた程で、此方も何等気にとめなかつた。今朝方まだ暗いうちは、隣の青木が水を欲しがつてゐたので水筒を手渡したりし、自分には腹が減つたなどと云つてゐた。ところが起床頃、暑い暑いと頭から湯気を立てながら汗をかき、それがいくら拭いてもきりがない程あとからあとからと出て来る様で、そのくせ全身が汗ばむのではなく、検温の時には五度五分しかなかつた。この汗が食事の時まで続き、さて食事の際となつて急に元気をなくし、今までになく起き上る事もせずに食事をとらうとする。腹は減つてゐるが身体の自由がきかない。それを無理して食はうとする。頭を動かす事なく汁の入つた蓋盆を口のところへもつてゆく。勿論汁はこぼれる。今朝自分が飯上げや分配でかまはずにゐる間に、ふとん、病衣等を汁や粥でぐしよぐしよにしてしまつた。終りの方は自分が箸をとつて食はしたが、この時には幾分言葉がもつれる様であつた。それでも、食欲は旺盛で、特食も軟菜も粥も全部食つてしまつた。飯盒洗を済まし、洗

面してやらうと手拭をしぼつて来た時には、汗はすつかり退き、顔の色もさめ、今度は寒気がする様だつた。今はふとんをこつぼりかぶつて眠つてゐる。便器の都合で、今日こそ自分の隣から部屋隅の寝台に移らなくてはならない。この移転は〈診断の都合で〉大分以前から云はれてゐたのを、のびのびにして今日まで来たものである。

（三、一一）〈本人は移転をいやがつていたものであろう。〉

○三月十一日加茂仰順軍曹〈竜大の先輩〉来訪。一月に一ノ瀬軍曹より加茂氏が報道班にゐる事を聞き、面会に来てくれる様依頼したのがやつと今になつて実現。他に所用あつてとかで柵をはさんで僅かの間話し合つただけ。後送までに〈の〉再会を約して別れた。

○三月十三日午前九時四十分。村上は今臨終である。眼は開いても物が見えない。いくら呼んでも何の反響もない。痰がつまるらしく、のどがごろごろ云つてゐる。朝五時少し前頃辻義人死去。その臨終に看護婦を呼んで来た際、彼へ村上〈は一昨日と同じ様に額から汗をかき蒲団を蹴り放つてゐた。その時はまだ「暑くてね……」と口がきけてゐた。朝食の際既に返事はなく、最後の粥を食べさしてやる事も出来なかつた。それでもこの前の事があるので、やがて意識も回復するかもしれないと望みをもつてゐたが、遂にその事もなく、事務室には既に「村上孟英霊」の名札まで用意されてゐた。彼とは長い間隣り合つて寝、場所の移転も一日一日と延してゐたが、昨朝遂に別れて部屋隅の寝台に移り、昨夕は彼の褌を洗濯してやり、今日は襦袢を洗つてやる事にしてゐたものが、かう急に容態を変へてしまつたために、何の遺言めいたものも聞く事が出来なかつた。先に柴田と別れ、今又彼と相別れ、凡そこの病院で親しくなつた友人らしい友人のすべてが、自分に先立つて逝つてしまふ。自分と気心

の合ふ者はすべて斯様な運命に支配される様で、一種妙な気分がする。彼の最後の贈物として、僅かの粥を奥井と分けて食つた。彼は自分に世話になつてゐるのを気にしてか、食へば食つてしまへる食餌を、何時も少量余らしては、空腹な自分に食はすのを常とした。通報患者に与へられる一枚のパンを、その時は食はずに、よく消灯後コッソリと半分を自分の方によこしてくれた。部屋長の〻が変物なために、寝物語とて大して出来もしなかつたが、自分の憂鬱な苦情やためいきの同情あるききてとなつてくれた。病人の誰もが同じながら、内地へ帰る事を待ちに待ち、帰つてからの楽しみを夢みながら、後送の寸前にしてたほれてしまつた。全く可愛さうだ。共に長野の山野を逍遙することも永遠に絶ち切られた望みとなつてしまつた。（三、一三）

○三月十三日午後二時三十分、村上孟君死去。五時、菜の花を捧げ、裏門前まで英霊を担送す。空曇つて寒し。

○夜中、田中の叱声に目を覚された。隣り合つてゐる中西が田中の手箱に手を入れた入れないの喧嘩、その時の田中の曰く〃まだ死んぢやゐないのだぞ、死んでから探れ〃　死の近いのを覚悟してゐる者の悲痛な叫びである。行木、辻、村上と相次いで逝き、自らも最近頓に気分が悪く、やがては二報患者の常として、彼等の後を追ふ事を覚悟してゐたのであらう。知識や人格、品性の如何を問はず、かくもなぐさみのない異国の病院で、やがて自らの生命の終ることを意識してゐる一個の人間。これがあはれでなくて何であらう。（三、一一）

○三月二十三日。稀に見る快晴。気分爽快。久し振りに洗面す。昨年と比べて今年の三月は雨天続き、長い間日の目を見ぬ寒い日ばかりであつたが、それもどうやら今日あたりからもちなほすらしい。

昨二十二日、加茂氏来訪。二、三分話して忽々と戻られた。煙草、南京豆をいただく。

○鉄条網を越えて野菜をとりに行き、週番上等兵に見つけられて叱られる。型通りの御説教を長々ときかされる。勿論何の響くところもなく、殊勝な顔をしながら早くすまないかなと心で思つてゐる。目の前で捨へて〳〵さされた菜葉を、夕暮になつて又とりに行つて来た。（三、二三）＜古参二等兵の本領発揮か。〳〵

○部屋の空気が腐つてゐる。事は食事分配から。導火線は相変らず曹長の許にある。兵長が馬鹿にいばり出して来た。通報の中西が喜んで飯上げに行き出した。川島がものを云はない。それ以上に自分は彼にものを云はない。自分や奥井のゐないところで裏切的な事を云つたのが耳に入つたからである。今では担送も護送も更に独歩も飯の量は同じである。兵長はあくまでさうせよと頑張る。此方もそれならと私物料理を作つては自分等だけで食つてしまふ。時々中西などを使つて相手も真似をするが、大ていは黙つて見てゐる。それでもさすが曹長は〝くれ〟と請求する。昨日も奥井に〝漬物は？〟とさいそくして〝ありません〟とやられ〝俺はお前等の様に楽しみで漬物を食ふんぢやないんだぞ！　飯が食へないから漬けてくれと頼んでゐるんだ！〟等と勝手な御託を並べてゐた。彼は今扁桃腺をやられて殆ど声が出ず、熱の加減か食欲は減つて来た。大分弱つてゐる。かかる時が来るからこそ平素の行ひが大事なのだ。今更人を役ひ、人に頼まへろ〳〵うとしても誰が相手になるものか。以前からの行がかり上、自分には何も云へず、今又奥井に見放され、仕方なしに青木と中西にたよつて、どうにか当座をしのいでいる。（三、二四）

○諸物品を中国側に引渡す少し前に、使役をとつて聴とくして置いた缶詰、パン、砂糖の類がこの程発覚し、中国側兵舎の前に、山の様に箱が積んである。土中から掘り出したものである。早く食はせばよかつたものを。

（三、二四）

○ Ich kann fasten, Ich kann weiten, Ich kan denken. 〈ファステンを〉断食と訳せば意が逃げる。衣食の道に拘はらぬ事。道心の中に衣食ありと達観出来ることである。「バイテン」、持続すること、あはてぬ事、三日天下で終らぬ事。悠々として何時でも衣食にとらはれずに暮せる事。〃denken〃は正智を出す事。思惟、正覚（三、二四）〈ドイツ語文はヘルマン・ヘッセの『シッダルタ』より。現実生活と対せきへ原漢字・足＋庶〉的。〉

○三月二十二日　体重測定　四八、一〇〇（〈十〉一、一〇〇）　〈二週間ぶり〉

○後送の話ばかりは盛んに出るが、実現を見る事なく、遂に四月の月を迎へてしまつた。もうかうなつては、延びるとしたところで僅かの事であらうが、待遠しい事夥しい。連翹の花も落ちて蘇芳桜が盛りとなり、菜の花はすでに色さめてしまつた。もう蛙が鳴いてゐる。不順だつた天候も回復して気温上り、又々南京虫に悩されて睡眠が十分とれない。後送用にと渡つた鱗寸もたちまち減つてゆく。四、五日前から八度代の熱が続き、身体倦く頭が痛む。（四、二）

○昨夜も南京虫のために眠れなかつた。そのためかそれとも胸の方から来てゐるのか、身体がとてもだるい。起き上るのが億劫である。何か為ようとするだけの気力が起きない。万事大儀である。気温が頓に上り、既に鳥の声さへけだるい様だ。しきりと、昨年武漢大学に入院した（今）頃の事が想はれてならない。その想出は、食欲の不振や身のやつれ、だるさ、えらさ、つらさ等に連なるもの。どうも今年もあの様に衰へてしまふのではない

ゐ等と心配である。後送にさへなれば万事が片付くだらうに、何時までも愚図々々してゐたのでは、どんな事態に至らぬとも限らない。どうも至りさうな気がしてならない。朝、熱い雑炊の香を鼻にしながら、しきりと武漢大学で毎朝雑炊をすすつてゐた頃を思つてゐた。（四、三）

○土産はおろか、記念品として何一つ持帰らなくてもいい、ただこの身体さへ内地へ運べばいいのだと思ひながら、時にはこれは持つてかへりたいと慾を出すものもある。手帳類がそれである。つまらぬ記録ながら、自分が書いて来たものは捨てたくない。今度の達しでは手帳二冊と定められたために、十九年度の日記その他を灰にしてしまつた。村上の遺品として、家族の人に渡して上げたいと思つてゐた彼の手帳も焼いた。それから煙草ケースを処分するにも未練があるへあつた〉。あの満州で親しい人々から貰つた手紙の束ばかりで作つたケースは特におしいへかつた〉。ひしやげながらも、今まで大事にして来たそれではあるが、これも機密書類隠とくの疑を受けるおそれがあるので、捨ててゆかねばならない。だが勿論、かかる未練はささやかなもの、何はさて我が身体である。これさへかへれば十分である。（四、三）へこの事もすつかり忘れていたが、十九年度の日記とは教育召集期間中のものであろう。整理番号5の手帳に、その期間のものが殆ど無いのはそのためである。〉

○診療主任が油へ一斗缶だつた〉を工面し、婦長殿が塩を寄付して、菜葉の沢いためが配給された。トウの立つた菜と骨だらけの大根、それにクローバ。病院の給養も変つたものだ。昨日は田中の時計を周旋へ鉄条網越に中国人と交換〉して南京豆にありつく。三度の入院で三度共一緒になつた一条へ氏の記憶も皆無〉の故郷を初めてきく。福島県との事。歌を作るので話が合ふ。腐つた部屋の空気を逃れて、屋外の草の上で話し合ふのが日課に

なつた。青木が大根を盗つて見つかつてから、曹長が「お前等が食ふから食ひたがるのだ」との事に、この頃では何の私物料理も作らない。川島とは相変らず口をきかず、一条から貰つた大豆のいつたのを一人でポリポリ食つてゐる。一昨日、熱湯を寝台に注いで南京虫を退治してから、気温の下つた加減もあつて、二日程どうにか睡眠がとれて気分がよい。（四、七）

○〃静かにぞねむらせたまへ人間の命死にゆく時のをはりに〃林芙美子の「放浪記」の中に、この大熊長次郎の歌が引かれてゐた。大熊長次郎とは？と思ふと、その先生なる人が「あの人」であつた様に思ふ。その「あの人」とは？　ところがこの人の名が出て来ない。何だか喉の辺まで来てゐて思ひ出せない。忘れてはならない歌人なのに。あの人の弟子の名が浮んで来た。相坂一郎。それに橋本……（橋本は出ても名が出ない。橋本左内等愚にもつかない事を連想してゐる）橋本徳寿、やつと出て来た。だが肝心の「あの人」が出ない。柏と云ふ字がぐるくると廻つてゐる。その人の歌集に柏のつくものがあつたのか。――嘲笑すべき呆けた自分。これでも内地へかへれば昔の様に歌にもかかはらうと云ふのか。自分はいらいらとした神経の中で、やつと小泉八古泉〉千樫の名を想ひ起したのである。実に無能な自分、二年間の豚の様な生活がうらめしい。――でも又かうも思ひなぐさめてみる。小智なんど一切なくなればいいのだ。才智、雑念の一切がふるひおとされれば、自然、心も澄んで来よう。何は忘れ、何は知らなくとも、己が心の〃まこと〃、純情、愛、かう云つたものが残ればいいのだ。人のまことに同ずる心、あはれを知る心、純一無雑の真心、ああこれのみ。（四、八）

○後送について聞かうとするだけの気も起らない。話が出てもまともに受け入れ〈られ〉ない。と云つて後送を

ふ気持は日一日とつのるばかりだが。待てと云へば待ちもしよう。四五旺までこぎつけた身体だから、余程の事がない限り、掛盒一杯余り二食の給養でも、どうにか二月や二月は生命も続くだらう。だがこれから次第に暑さに向ふこととて、伝染病の発生もあらうし、どんな不測の事態が起きんとも限らない。今日なら帰れる身が、時期を失した為に大陸の土に化し去るのは、想つてもぞつとする程やりきれない。思ひきれない。（四、八）

○新日本文学全集「林芙美子集」を読む。放浪記等十編〈ママ〉中、「泣虫小僧」「女性神髄」を良いものと思ふ。女流作家としての名は早くから耳に入つてゐたが、両本かの子女史程の深さ、広さは見られない。（四、一〇）

○芦ノ牧温泉（若松より三十分）へ一条氏より耳にしたのであらう。〉

○本院内科が後送される事に決り、外科の一部も出るらしいとの話を聞いたのは一昨夜だつたが、出発する筈の昨日が何の事もなく過ぎ、その間三度も四度も命令が変り、結局今朝早く内科から百名程の者が発つことになつたと云つてゐたが、それもどうだか判らない。新聞には伝染病の事で悪くゆけば来年の増水期まで待たねばならぬ等と書いてあるし、落胆すること甚だしい。極端に悪い現在の給養の下に、辛うじて我が身を養ひながら、故国に一歩を印すときを夢みてゐる我々の気持、それは望郷とか、懐郷、郷愁等といつた生やさしいものではない。正に狂ひ出しさうなあこがれである。為すことがあり、楽しみがあり、健康であつての待期ならば辛抱も出来よう。然し柵の中に閉ぢ込められ、日の長いのを喟ちながら、而も日に日に衰へてゆく我が身をみつめながらの日暮へし〉は、悲しいの、心細いのどころの話ではない。一週間に一旺半も痩せてゆく現在、この身体で三月も四月も等と想つただけでぞつとする。どうか早く事なしにかへしてほしい。かへして下さい。運命を待つと云ふよ

り、矢張り何か大きい力にすがりつきたい気持である。（四、一二）

○谷崎潤一郎著「蓼食ふ虫」を読む。氏独特の趣味に関する冗舌がきさである。壬生狂言見物の記事あり。（四、一三）

○兵長殿万歳」「赤谷さん万歳！」　今朝方から脳病を起した様にこんな事ばかり云ふ田中の声がいまだ続いてゐる。そしてその声をバックアップして、碼頭から響く船の気笛へママ〉が悲壮な空気をかもしてくる。自らの後送不能者である事を知つて、急に容態を悪くした田中、自らの生命の臨終を知つて同室の者全部に南京豆を分ち与へた彼、今では最早痰を吐き出すだけの力さへない。いづれ長く保つ生命ではない。（四、一三）

東京都世田谷区赤堤町二ノ六〇二　田中与一方　（東京都世田谷区太子堂町四四七　田中芳雄方・四一号室）

○十四日午前九時三十分田中敬太郎死亡。それと前後して重症者の二分へ第二分隊〉転送が命ぜられ、待望の後送愈々明十五日実施との事。この日寒気酷しい中を、あたふたと後送の準備が進められ、寝具さへ返納、夜寒くて一睡も出来ず。一時頃十五日の携行食支給さる。

翌十五日五時起床、六時整列。歩いて海軍碼頭に至る。昨へ前〉夜の冷えか、腹痛ひどく、歩くに際しては、神経痛か左腰より股にかけて痛むこと甚しく、やうやくにして二粁の道を歩き終る。強風の中を、小雨さへ時々見舞つて来る寒い天候の中を、携行品検査を受ける為に川岸に並び、夕方まで苦しい身体をもちこたへる。朝下痢排出、その代り腹痛は止る。腰、足の痛みへトラックから転落した後遺症か。復員後も数年これになやむ〉はしばらく立つ事さへ困難で、いつもびしよびしよの泥の上に腰を下してゐた。へ夕方〉六時頃乗船開始。伝染病

患者が第一で、位置は最上部の甲板。寒いには寒いが空気は新しい。全員約四千名、狭い事甚だしく、乗船終了は翌日にかかつた由。但し此方は疲労のため早くから眠り、出航時にやうやく目覚めた。案じてゐた程寒くはなく、十分睡眠をとる事が出来た。

出航は十六日午前六時。午後三時九江着、碇泊。船中より見る街の状況、以前よりはるかに整備され、特に煌煌たる電灯を列ねた夜景はは、何年か振りに見る珍しい景色であつた。食糧は乾パンのみへ全部で十四枚の支給だったと覚える。すると一日二枚あての勘定になる〉、腹工合快へ回〉復。十四日の月明るし。

十七日午前五時九江発。十一時頃安慶通過（以上一七日記）。午後六時蕪湖着、碇泊。

十八日午前六時蕪湖発。下船準備。十時南京着。一部下船。空腹。腹を充さんが為には、携行物品の売払等、何等良心の苛へ呵〉責なしへ船中警備の中国兵と、外套を飯盒一杯の飯に交換した〉。夜船中にて一泊。

五時起床。下船。汽車にて上海に向ふ。但し担送等は別の船にて回航の由。身体の調子、心配する程の事なし。相変らず腰痛し。今日十九日、出発は午後十時頃、一貨車七十数名、甚だ狭し。小雨。常州着。

二十日午前八時。晴天となる。麦の穂、タンポポ、蓮華草、桑の芽ぶき、ツバナの芽。途中停車する事多く、午後七時頃漸く上海着。下車より駅前広場集合まで四、五時間を要し、歩行車行等種々云つてゐる間に時を過して、結局コンクリートの野天に宿営。冷え甚しく、早朝下痢便を排す。

二十一日午前八時頃、再び構内に入り、貨車にて某地点に至る。普通ならば十分程のところを、五、六時間を要して午後二時頃下車。広場に休憩中、禁を犯してパンを購ひ、衛生兵の班長より制裁を受く。自尊心をきづつ

けられる事甚だしく、而も自己の行為を恥づる点毫頭もなし。くやし涙が出て仕方がなかつた。（其の際の小輩へ子供〉の同情的言辞。食糧配給の不公平へ十四枚の乾パンを指す〉）（大便料五〇元、飴玉一〇〇元）夕方飯盒蓋一杯の粥支給。暗くなつてから出発。道程七粁と云ふが、青葉病院（一陸・第一五七兵站病院）に着いた時は十時半。辛うじて歩き切る。腰痛。娯楽室に入つて落ち着いたのが十二時頃。

翌二十二日、風邪熱と行軍の疲労にて身体だるし。被服滅菌。一日二回給養、粥、蓋に一杯そこそこが一日分。空腹やる方なし。翌二十三日、昨日より更に悪調。HB患者一緒に集る。

二十四日、HB患者病棟に移転との命が来るのと、娯楽室内にへの〉コレラ患者発生と殆ど前後すへせず〉。従つて我々も禁足。当分隔離のため、後送も延びるだらう。本日より給養漸く順調となる。風邪のためか、咳、痰頻発。毎日防疫業務に繁忙。睡眠は順調。給養は三食なるも副食物に変化なく、主食勿論不十分。

二十九日、天長節。何の祝意もなし。此の日、第二次後送者中に自分の名を見出す。第一次は第一班より第三班までの者多く、我々第六班の者は殆ど第二次となる。

○一次、二次合して第三十一次後送要員として近日後送される事となり、注射、検便、各書類作成等順調に進んでゐた矢先、五月二日夜、第四班より真正コレラ発生。少くとも半月は隔離される事となつた。娯楽室は設備も給養もよくへはゝなく、加ふるに到着以来、身体の調子が思はしくなく、特に三日程前から又もや下痢便を排する等で心細い事甚だしい。

○先日の防疫査閲に際し、防疫標語に応募し、見事落選。提出標語「蠅一匹生きて千余のいのちとり」等五首。

○身体の調子、相変らずはきはきせず。給養が悪いのと、班の空気が気に入らぬのとで、内地に帰る希望を失ふ時さへある。五月六日、第三十一次の輸送指揮官の某大尉が来て、訓示と共に患者の首実検を行ひ、我々HB患者の大半は付箋付となつて、一応病床日誌をしらべた上弱い者は担送として病院船でかへす様にするとの事。日誌の上では嘗ての通報患者であり、現在独歩ではない自分等へは〉先づまづ残されてしまふ方であらう。さうなると第何次の復員計画に加へられるか、当分後送の事は放念しよう。

○ここ三日間程の事は全く混乱のうちに過ぎ去づてしまつた。前文に記した様な杞憂は、遂に杞憂のみに終らなかつた。五月八日、六病棟に移転の命令を受けたのが正午頃。被服、滅菌等で手間取り、六病棟で一週間分の糧秣を受領した時は既に夕刻。其処から本部横の広場に集結し、私物検査を受け終つたのが八時過でもあつたらう。一体こんなことがあり得ようか。もう飯の多少を云はなくてもよい。一週間もすれば内地の土が踏めるではないか。全く怎つても変な気がする。どうも調子がよすぎる。病院前の市政府まで私物を携行して歩いたが、僅か十分程の行程も糧秣の重みに全く苦しんだ。市政府の建物の中で一泊する事になり、初めの一時間程は狭いのを喞ち乍らうとうとと睡れたが、やがて起されて後送番号を受ける事となり、いくら待つても自分の名が呼ばれず、斎藤、山田、奥井等も同じ様に呼ばれない点から、愈々テーベ患者として除外されたなと思ひながらも、若しかしたらの望みを残して午前三時頃まで待つてみた。然し遂に後送はだめ。田中、一条、五十嵐等東部の連中は帰れる事となつたが、先日付箋をつけられた連中は殆どすべて除外者となつてゐた。今となつてはあきらめなくてはならない。三十一次の中で、同県人とて吉原さん唯一人なので、糧秣を一緒にしてゐたが、就までかかつて分

配し、九日朝、横手左、程遠くないところに、船のマストを望みながら、青葉病院へ戻つて来た。その日六病棟十号室に入り、今後何時までか判らないが、当分後送不能者として待機することとなつた。三十一次の輸送指揮官が云つてゐた様な、三十三次の病院船による後送に加へられる事は不可能である。漢口から一緒に来た弱い連中は皆この三十三次に含まれ、明日にも帰るさうであるが、三十三次に廻されるのをおそれて、熱発をさへかくしてゐた我が身がおかしい。然し、すべて運命とはかくの如きものであらう。今後はあせる事をしない。気永に身体を養はねばならない。

○五月十一日、錬成病棟に移転。同勢約四十名。

十二日、HB患者以外、後送のため転出。一ノ瀬班長、奥井、後送者名簿に入る。山崎班長同様。

十五日頃、隔離患者解放されて合流。錬成病棟勤務員の当番専属となる。食事については何の心配もなし。

○五月三十日。三病棟五号室へ移転。四十次解散。四十八次に編入さる。当番をやめる。六月二日、九号室へ移転。空腹。〈ここで手帳は終る。その後の詳細は不明。ただ挟まれた一枚の紙片に次のような簡単な記載がある。〉

○6、23　青葉出発。碼頭倉庫にて一泊

24　一泊

25　五時起床。九時乗船。輸一九号〈輸送船番号だろう〉。嘔吐。

26　佐世保着（夕刻六時頃）

28　検疫

7、1　午前七時佐世保出航。午後一時博多着。入港シテ港外に戻さるへママ〉。

2　午後三時入港シテ又戻サル。

3　午前十時頃より再検疫

4　午後二時、港外ニテ試運転

5　午後二時、第八岸壁ニ繋留

6　午前、検疫後上陸（九時）、コレラ注射、DDT消毒。私物検〈査〉。午後七時博多港駅発。

7　午後二時大阪着。五時天王寺発。

〈内地の山河を前にして上陸できなかった十日ほどのもどかしかったこと。もう無用だと、荷物を天王寺で金に代えようとしたが、家まで持帰りなさいと勧められて思いとどまった。この荷が重い。〈奈良県〉五条駅から今井の叔父宅に電話したら、いとこの長義が自転車で運んでくれた。身軽になったとはいえ、元気とはいかず、足許は定まらなかったであろう。空はまだ明るかった。岡松の辻で〝兄ちゃんおかえり〟と〈妹の〉貴美子が。その後からお前〈堀直子〉のお母さん〈幸代〉が迎えてくれた。この日が昭和二十一年の七夕に当る。このようにしてわたしは二年半振りに帰り着けた次第。〉※このあと、軍隊での知人住所録に三十三名を記し〈うち何人が復員できたであろう。現在も文通しているのは森孝次郎氏だけ、それと、亡くなった柴田氏を除き、他の全員が記憶から消えてしまった。〉※このあと民謡・食物の製法のメモがあるが省略する。

あとがき

直子よ。お前から二、三年前に貰った「ともし火」へ日付なしの日記帳〉を何に使おうかと思案していたが、このように古い手帳を転記することにした。そしてこれをお前におくる事にした。迷惑かもしれないが、血のつながる者の中で、他にその相手がいない。

今から四十年近い昔になる。わたしは満年令で二十八才から三十才、今のお前と同じような年頃だ。時代の変化ははげしいが、似た年頃の者に通じる何かがあるかもしれない。と思ったことも、お前におくる一因である。

冗長な文章はいやになろうし、ばかに多い漢字も読みづらいだろう。だがこの中にわたしのありのままの姿が浮んでいるはず。およそ恥しいほど低次元の暮しながら、異常に制約された条件の下での人間が、どのような生きざまを示すものか、それを汲みとってもらいたい。またことごとしい戦闘場面とは無縁のところでうごめいていた一兵卒の繰言（くりごと）を通して、軍隊や戦争の一面を知ることも、まんざら無意義ではあるまい。

絶ちがたい生への執着。それも親しい人々との再会を願うがゆえであった。その願いが叶ってから、はや三十数年がたつ。あれ程の念願も執念もあっさりと風化してしまった。しかし、それも自然だと片づけてよいものかどうか。今にして当時の心境を反すうへ原漢字〉するのは、わたしにとっては大切なことのように思う。今一度昔にかえって、今後に備える種としたい。

ところで、現在わたしの手許には四十冊余りの日記帳がたまっている。でも兵隊時代のものは当然欠けている。この冊子は手帳の写しながら、相当委しい日記帳でもある。従ってこれは、一連の日記の欠を補うものであることを申し添えておく。

昭和五十七年四月三日　赤谷明海しるす　　堀直子へ

菩薩蠻　―李清照（一九）―　原田憲雄

風やわらかに日かげ薄く春はまだ早い／袷を着たらやっと心地がよくなった／寝起きの身にはすこうし寒く／梅のはな鬢のあたりにくずれてる／／ふるさとは何処かしら／忘れっちまった酔わぬとき以外／ねるときくべた沈水（ちんすい）の／香は消えたが消えぬ酒の香

双調。四十四字。前・後段とも、前の二句は仄字で、後の二句は平字で腹韻をふむ。八世紀のなかごろ中国にはいった異国の音楽に合せて作られた詞調で、李白の名作と伝えるものにこれのあることは「詞論」のところで紹介した。「子夜歌」などの別名がある。

風柔日薄春猶早。　Fēng róu rì bó chūn yóuzǎo.
夾杉乍著心情好。　Jiāshān zhàzhuó xīnqíng hǎo.

旧暦の正月七日を人日といい、七草がゆを作り、髪飾りを互いに贈ったりする。新暦で二月の二十日前後だから、春とはいってもまだ早く、年によっては雪が散らつき、暖い年でも陽ざしは薄く、しかし風のおだやかなある日。初句はその微妙な季節感をたくみに描く。「夾杉」はあわせの長い上着。それをはおって、この詞の女主人は軒下の陽なたに長椅子をもちだし、梁の簡文帝の「梅花賦」を読む。「……ここに重闉の佳麗の、かたちなよやかに心みやびなるひと、早花の節に驚くを憐れみ、春光の寒きを遣るを訪（ねぎ）ろう」あらまあ、あたしみたいなひとなのね。女主人はほほえんで次を読む。「夾衣はじめて薄く、羅袖はじめてひとえなり」ことよりはだい

ぶあたたかそう。「この芳花を折り、この軽袖を挙げ、あるいは鬢に拝して人に問い、あるいは枝を残（ちぎ）りて相授く」ここまでくると、かつて家族や友達と、この賦の文句そっくりにぎやかに遊びたわむれた日が想い起こされ、今のひとりがかなしくなった。花の枝を贈るひともいやしない。うつうつそんなことを思っていると、いつのまにか彼女の横たわるところが宋の武帝の含章殿の軒下になっていて、梅の花がひらひらとしきりに散り、花びらが額の上におちその五つがぴたりと一つの梅の花となり、払ってもとれない。いつの間にか横に皇后さまがいらっしゃって、「そのままにしておき。あなたによく似合ってよ」とおっしゃる。得意になって起きあがろうとしたら眼がさめた。「あら、いやだ。何かで読んだ寿陽公主の話そのままじゃないの」

睡起覚微寒。　Shuìqǐ jué wēihán.

梅花鬢上残。　Méihuā bìnshàng cán.

陽がかげってさむい。ふと鬢に手をやると、ひしゃげた梅の花がぽとりと落ちた。ひざの「梅花賦」のつづきは「春風の梅を吹いて落ち尽さんことをおそれ、わらわはこれがために蛾眉をひそむ。花色もちて相比し、つねに愁いて時を失わんことを恐る」まるで今の自分をあざけるような文句だった。ここまでが前段。

故郷何処是。　Gùxiāng héchù shì.

忘了除非醉。　Wàngle chú fēizhuì.

「故郷」はわが中世の「ふるさと」と似て、最も親しいものの住む、しかし今は隔っている処、である。故郷は何処に、ということばには、その親しい人が今どこでどうしていることやら、という感情がこもっている。寝

ても覚めても心にわだかまっている思い。忘れっちまった酔わぬとき以外。酔わぬかぎりは忘れようもない、という気持が、酔わぬかぎりは、というより駄々っこめいて辛らさの響く言いかただ。口語のこんな発想は李清照の独り舞台で、まねたらまねることが嫌や味になってしまう。

沈水臥時燒。　　Chénshuǐ wòshí shāo,

香消酒未消。　　Xiāng xiāo jiǔ wèixiāo.

ねるとき香炉に沈水香、沈香ともいう香をたいた。目覚めたいま、香の煙はもとより残香も消えている。香の煙は恋しい人の幻をよびよせる、という伝えがこの句にはひそめられ、忘れようとして飲んだ寝る前の酒のおくびがいまも消えずに、夢にも現れなかった「ふるさと」のない、酔めたいまのしらけた感情として結句にゆらゆらただようている。

（一九八五月一月十八日）

※前号（第三六号）一四頁一二行の「『水甕』四月号」は「『水甕』三月号」と訂正します。（編者）

翻訳　ーランカーの岸辺で（四）ー

原田憲雄

あるくにの言葉を他のくにの言葉に移しかえることが果して可能なのか。翻訳にたずさわる者がまずぶつかる疑問がこれであり、いつまでたっても払いきれないのもこの疑問であろう。ところで、同じくにの言葉であれば他の人のいうことが正確にこちらに伝っているのか、と省みると、そうではないらしい。わたしのいう言葉が誤

解されているらしい、と感じるとき、他の人の言葉も誤ってしかわたしに到達しないのだろうとうなづかれる。このとき、わたしはあらゆる言語理論の出発点に立っているはずであり、そうして楞伽経の出発点に立っている。もう少し先の方で触れることになるだろう。さしあたってここでは、それほど根本の問題ではなく、この経の漢訳三本を、サンスクリット本の方からではなく、翻訳した側の中国の事情や、その事情にぶつかった訳者の条件の方から眺めてみようと思うのだ。

この稿の（二）に記したように、記録にのこる最初のものは涼訳『楞伽経』四巻でダルマラクシャが四二一―四三三の間に訳したという。訳本は失われ内容を確かめようはないが、とにかく訳者については考えておかねばならぬ。『高僧伝』巻二にその伝がある。

ダルマラクシャ（三八五―四三三）は中インドの人。六歳で父に死に別れ、カーペットの織工をしていたが、母の信仰する仏僧の弟子となり小乗を学び、諸学に通じ、ことに呪術に巧みだった。のち、白勇の禅師に遇い樹皮に記したねはん（涅槃）経を授けられ、読んで大いに驚き大乗に帰依した。二十歳で大・小乗の経典二百万シュローカを暗誦した。呪術によって国王の信仰を得たが、後に王の気持がゆるんだので去ってカシュミールにゆき、その地の人が小乗の徒でねはん経を信じないので、さらに北行してクチャに行き、東に向って敦煌に達し、数年のちの四一二年、涼王と自称していた沮渠蒙遜（そきょ・もうそん）にまねかれ姑蔵（甘粛省武威）に入る。三年間、漢語を学び、河西の学僧として知られた慧嵩・道朗を助手として大般（たいはつ）ねはん経の前分十巻（一説に十二巻）を訳出、、いったん本国に帰り、母の喪にあい、一年余りとどまり、コータンでねはん経の残りの一部を手

に入れもち返って訳しつつ、さらに使いをやって探させ、四二一年完訳した。『高僧伝』には三十三巻と記すが、四十巻とも三十六巻ともいわれる。このほか大集・大雲・悲華・地持・優婆塞戒・金光明・海竜王・菩薩戒本等の諸経六十余万シュローカを訳出した。当時、涼の西北にあった魏の国王がダルマラクシャを求め、得られなければ兵を出す、といって来た。涼王は、かれが魏にゆけばその呪術によって涼に不利になろうと恐れ、さらに経典を探しにゆけと命じ、途に刺客をはなって暗殺した。

かれの訳出した経典は、物語的なものが多く、理屈っぽいものはなく、思想としては深くても、表面は誰でも楽しんで聞くことができる。そうしてダラニを含むものが多い。ねはん経を中心として、いわゆる如来蔵系の経典が多いから、かれの思想が訳出する経典の選択に現われていることが知られるが、一面、当時かれの周辺にいて読者となるべき人たちの関心を考慮するところもあったに違いない。かれを尊敬したという涼王にしても、魏王にしても呪術師としての能力にひかれたので、かれが最も聞いてほしかったはずの教えはほとんどかれらにとって理解しがたいものであったろうことは、かれの死にまつわる伝えが語っている。クマーラジーヴァはじめ他の訳経三蔵たちにとっても事情はほとんど変らない。それを承知の上で、いつかは真の読者の出てこようことを信じ、訳経にいそしんだ。

ダルマラクシャが楞伽経を訳したというのは費長房『歴代三宝記』(五九七)に記録するのがはじめらしい。だから、伝えそのものが疑えば疑いうる。しかしかれの訳出経典と楞伽経とは思想的に親近の関係にある。かれにその訳があってふしぎではない。ただ、かれの訳した楞伽経が「四巻」と伝えられるため、宋訳四巻本と同じ内容で

あろう、と推測し、最も古く互いに十年ほどしか隔らぬ涼・宋訳が共に四巻だから、その梵本は同じであったはず。というのが今日の宋訳の底本原型説という通説を支える論理である。宋訳のような理屈っぽい経典をダルマラクシャの訳経群の中へ入れるとそれだけが目をむいたようにきわ出つ。その不自然をどう説明したらよいのか。楞伽経は漢訳三本ともに品立てが異り、品の構成では梵本とほとんど同じ唐訳・チベット訳でも、唐訳とチベット訳では品の切れ目の違うところがある。それなら、巻数が同じでも、その内容が違っていたろうことは考慮から除外することはできぬ。ダルマラクシャの訳経とのつりあいからすれば、「請仏」「問答」「遮肉食」「陀羅尼」、がかれの訳した楞伽経「四巻」の内容だった、と推測することも可能である。現存せぬ涼訳についてあれこれいうのは無益だが、その無益の上に通説が築かれている。すくなくとも通説の根拠の一つの成り立ちにくいことを明らかにするためには無益と思われる作業もしておかねばならぬ。次はグナバドラ。『高僧伝』巻三による。

グナバドラ（三九四－四六八）　中インドのバラモン出身。諸哲学はもとより、天文・書算・医方・呪術などに通じた。のち小乗の理論書「雑阿毘曇心論」を読み仏教に帰依し、経・律・論の三蔵を学び、のち大乗に転じ華厳経に傾倒し、ぼさつ戒を受けた。温和な人柄で、父母にじゅんじゅんとして説き、父母も感動して仏教に帰依した。ランカーにゆきそこでも厚遇されたが、船で中国にむかい、苦難のすえ四三五年広州に達し、宋の文帝劉義隆の使者に迎えられ都の建康に入った。高僧の慧厳・慧観が労い、祇洹寺に住居を供せられた。帝に招かれるとき文豪の顔延之が束帯して門で待ちうけた。皇族の大将軍劉義康、丞相劉義宣らが弟子としての礼をとった。ただちに訳経を開始する。のち、義宣に従って荊州にゆく。四五三年、太子が文帝を殺して自立し、その弟の劉

駁がこれを討って即位する。孝武帝である。次の年、義宣が兵を起こし敗死し、グナバドラは捕われ都に送られる。義宣のもとにはいたが軍事に関っていないことが明らかになり、帝は許してさらに厚遇した。のちに帝がたわむれに「丞相（義宣）のことを思い出しますか」と問うと「十年もお世話になった恩義をどうして忘れられましょう。丞相のために三年間焼香することをお願いしたいのですが」と答えたので、帝は悽然としてこれを許した。あるとき帝の宴会に招かれ頭をそる間もなくぼうぼうたる白髪でやって来た。遠くからそれを見た帝は側近に「あの人は聡明で機転もきくが、だいぶ老けたな。試してやろう」。かれが階を上るといった「上人が遠くから来られたご意向に背くものはなかったとは思うが、でも何か一つぐらいはありませんか」かれは声に応じて答えた「わたくし、遠くからこの都にまいり、ほとんど三十年。天子の恩遇に対し、おはずかしいことこの上もございませぬ。ただ七十老病の身、一死あるのみです」。「つと問われ三十年、七十、一死と数字いりで答えた機転に感心し帝はかれを御座に近くすわらせた。帝は博識機敏の才士だが猜疑心の強い人だった。一言あやまれば死に連なりかねぬ。グナバドラにはそれがよくわかっていた。まさに一死をかけての答えだが、それをさらりとかわし得た。雑阿含五十巻をはじめ、央掘魔羅・過去現在因果・勝鬘・衆事分阿毘曇など大・小乗の経論五十二部を訳したといわれるが、その半ばは失われた。

いわゆる宋訳四巻本がグナバドラの訳した『楞伽阿跋多羅宝経』である。道宣『続高僧伝』（六四五）によると、ボディーダルマは弟子の慧可に四巻楞伽を授け「わたしの見るところ、漢地を教化するにたる経典はこれだけだ」といい、慧可も弟子たちに四巻楞伽を「心要」となさしめた、という。「四巻楞伽」が涼訳か宋訳かは、

道宣の文面では見分けはつかぬが、以後の伝承では宋訳ということになっていて、中村氏がへ禅宗でよく依用する〉といい、白居易が歌ったのもこれである。ボディーダルマが中国禅宗の祖達磨をさすこと、いうまでもない。禅宗史家の新しい研究（たとえば柳田聖山氏の諸著）では、四巻楞伽と達磨を結びつけるのは、道宣と同時の法沖あたりが言い出したことらしい。が、とにかく禅宗では重んぜられ、同宗が南北に分れ、南宗で金剛経を重んじ、北宗が衰えるにつれ四巻楞伽への関心がうすれ、蘇東坡のころにはほとんど顧みられなかったらしい。

グナバドラが四巻本を訳したのは、劉義慶（四〇三―四四四）が『世説新語』を編集した時期に前後し、その場所も相近い。機智にあふれる論議応酬を簡潔に表現した『世説』を生み、これを愛した人々の住む宮廷・寺院が、グナバドラの訳出した経論をまず読みまた論議するサロンであった。ここでは抽象・難解はむしろ高貴な価値であり、正確も冗漫をともなえば野卑として軽んぜられた。このサロンの漢人たちは、西北方の異民族によって中国の半ばを奪われ、そのことによって国際的な目も開かれはしたが、中国を奪った異民族に対する憎悪を深く心の深層にまで染めつけた人たちであった。その憎悪は、「ラーマーヤナ」のラーマをよしとする人たちがラーヴァナに対していだく憎悪と似たものではなかっただろうか。この推測に大過がなければ、ラーヴァナの成仏をめざす「請仏品」はかれらにはのみこみにくいものであったろう。グナバドラが楞伽経を訳したときは、かれが中国に来てすでに八年たったのちである。人情の機微をつかむに敏であったかれは、そのことを十二分に知っていたはずである。また、かれは中インドのバラモンの出身であり、バラモンの教養を積んだ人である。仏僧としての長い学習と修行によって偏見から離れていたとは信じるが、かすかにのこる宿習においてラーヴァナを

避けようとしたかもしれぬ。四巻楞伽のすぐれた注釈を書いたわが国の虎関師錬がその『仏語心論』で妄分別を明確に解剖しながら、序論というべき「統綱第一」で「けだし〈楞伽の〉秘要はこれ鬼神異趣の境界にあらず」という。鬼神異趣をつつみこめないような秘要を批判するのが楞伽経の出発点であろうのに、これこそ宿習の露呈ではなかろうか。いつともしれぬむかしからわたしたちの心のおくそこに染みついた差別観が、高僧の翻訳にもある影響を与えてしまう、ということはないのだろうか。

楞伽経のほかにグナバドラの訳した経でボディールチの訳したものと共通するものが二つある。一つは「菩薩行方便境界神通変化経」三巻でボディールチの「大薩遮尼乾子所説経」十巻にあたり、いま一つは「相続解脱経」二巻でボディールチの「深密解脱経」五巻にあたる。「相続解脱経」は「深密解脱経」の第四巻後半と第五巻に相当し、「深密解脱経」の抄本だろうといわれ、「菩薩行方便境界神通変化経」は「大薩遮尼乾子所説経」の古型だろうといわれる。グナバドラはボディールチより約半世紀古い人だから、そう考えておけばきれいに形はつくが、翻訳の時と処の違いから、グナバドラの方はできるだけ摘要を簡潔に示すことを目ざしたために、長いものでもあるところははぶき（時には大なたをふるい）、梵本が数種あれば最も短いものをとり、訳文も簡短にと心がけたため、ボディールチの訳本より短小なものとなった。そう考える余地はないだろうか。

『南伝大蔵経』は、ランカーで伝承された上座部の仏典を高楠順次郎氏をはじめとする学匠たちが協力苦心して大成した翻訳全集だが、「訳者が便宜上省略せる」ところがあちこちにある。それらはおおむね同じ文句が繰りかえされる処である。繰り返しをいとう日本の読者と編集の都合を顧慮してのことか。蘇訳にあり勝の事情である。

一九八五・一・二四